

# けやきゼミナール teacher's 版 No.15



## ○ あらためてインクルーシブ教育システムって？

文部科学省は「インクルーシブ教育」という表現は使用せず「インクルーシブ教育システム」と表現します。必ず「システム」をつけています。

では、文部科学省は2012年に定義づけをしています。「インクルーシブ教育システム」とは？実は障害者権利条約第24条によると「人間の多様性の尊重等の強化、障害者が精神的及び身体的な能力等を最大限まで発達させ、自由な社会に効果的に参加することを可能とする目的のもと、障害のある者とない者が共に学ぶ仕組み」とされています。

私は、ここで大切なのは、「共にいる」ではなく「共に学ぶ」ことだと感じています。教室に「共にいる」だけでは「インクルーシブ教育」ではないということです。「インクルーシブ教育」は、障害のある生徒が、通常学級に「いる」ことのみを目標としているわけではないのです。

ご存じのように、私は、インクルーシブ教育実践推進校パイロット校に3年間勤務していました。パイロット校では、「まずは教室で共にいる」という居場所づくりからスタートしてきました。インクルーシブ連携1期生は15名が入学し、そして15名が卒業していきました。1年生の時、体育祭で座席の位置がわからずリソースルームにこもってしまった生徒、登校を嫌がり担任が家庭訪問をする度に居留守になる生徒（チャイムを鳴らすと窓をしめる）、英語の授業になると腹痛になる生徒等がいました。インクルーシブ連携1期生が卒業式直前に、「インクルーシブ連携2・3期生（後輩）に向けてのメッセージ」をプレゼンテーション（PPT使用）しました。入学当時のことから振り返りをした生徒、部活動の思い出を語った生徒、インターンシップで失敗したことを語る生徒、アルバイト先でほめられたことを語る生徒、本当に様々でした。

その時、多くの生徒が、「定期テスト前には、きちんと勉強しよう」「授業はわからなくてもとにかくノートは眠らずとろう」「テスト前には、リソースルームに行って先生に30点をとるためにポイントを教えてもらおう」等の学習に関することを、1期生の多くが話していることに驚きました。

私は、知的障害のある生徒の「学ぶ」「学びたい」という気持ちを十分に理解していなかったと後悔しました。知的障害があるから「わからない授業を聞いているだけで苦痛であろう」「芸術や体育等の実技のほうが授業は楽しいであろう」等と思い込んでいました。

でも、知的障害のある生徒の多くは、「学ぶ」「学びたい」と思っていたんだと。改めて「わかる喜びは障害の有無に関係ない」と実感しました。

障害のある生徒もない生徒も、両者の発達を促し、障害等に対する差別や偏見を払拭し共生社会の実現をはかることを忘れてはいけないように思います。津久井やまゆり事件を二度と起こさないように！たやすいことではないことは理解しています。私は、目的をいつも忘れないようにしなければと言い聞かせています。



令和2年度キーワード…「組織化」「共有・協働」「探究」「ユニバーサルデザイン」「チャレンジ」

CHALLENGE…各自の目標を見つけ、それに向かって自らの能力や適性を伸ばし、挑戦し続ける

INDEPENDENCE…民主社会の担い手として、優れた判断力と強い責任感を備えた人物を育てる

GLOBAL…国際社会の一員としての自覚を持ち、自国の文化や習慣を大切にすると同時に、他国

の文化や習慣を理解できる人間に育てる